

論題 要介護高齢者の外出と閉じこもり防止に関する研究
-マズローの欲求階層説に基づく生活の質向上に向けて-

社会福祉学専攻 鎌田 洋志

【要旨】

本研究は、要介護高齢者の外出と閉じこもり防止に関する課題を、マズローの欲求階層説を理論的枠組みとして分析し、生活の質(Quality of Life)向上に関する支援の在り方を検討するものである。先行研究では、外出の量だけでなく質に注目する必要性が指摘されているが、本研究では外出行動をマズローの欲求階層説に基づいて分析し、生理的欲求、安全欲求、社会的欲求、承認欲求、自己実現欲求の各段階に応じて外出の意味を捉えることで、要介護高齢者の外出の背後にある動機を理解することを目指した。食料調達や通院のための外出は「生理的欲求」の充足につながり、散歩や安心できる環境の確認は「安全欲求」を満たす行動といえる。他者との交流や社会活動は「社会的欲求」に、ボランティア参加や地域・家庭内の役割活動は「承認欲求」に、仕事や趣味、新たな学びのための外出は「自己実現欲求」に対する活動と捉えられる。このように外出が単なる移動や量的な行動としてではなく、本人の欲求階層に応じた「意味を持つ営み」であるとして位置づけ調査を実施した。

調査対象は通所介護施設を週 1 回以上利用する 65 歳以上の要介護認定者 50 名とし、マズローの欲求階層説に基に外出の意味を問うアンケートを作成し、量的及び質的な質問を設定し、半構造化面接を実施した。調査項目には外出頻度、外出先、閉じこもり傾向、欲求充足度、心理的効果などを含め、標準化尺度として健康関連生活の質を評価する SF-36 (MOS 36-Item Short-Form Health Survey) と主観的幸福感尺度 LSI-Z (Life Satisfaction Index-Z) が含まれる。分析は統計解析ソフト SPSSver3.0 を用い、記述統計及び推測統計を用い分析した。またオープンクエスションの内容については質的に分析し、量的分析を補完し考察した。

研究結果として、一人で外出する群は健康観、生活満足度、幸福度が高く、より高次の欲求を満たす傾向が認められた。家族の支援を要する外出群は自己の選択的外出が制約され、低次欲求の充足にとどまり、幸福度が低い傾向が示された。介護依存度が高い通所サービス時のみ外出群は、「生理的欲求」、「安全欲求」を満たす外出に留まる傾向にあった。本人のみで外出が可能な自立外出群は介護サービス利用のための外出以外にも、交友を深める機会を持つなど健康観や幸福度も高かった。分析結果より外出支援は従来の安全確保や生活維持から、主体性尊重へと転換する必要性が示された。また家族支援も本人の意思決定を尊重する形へ再構築すべきであり、従来の外出支援のような家族が外出を全面的に管理するのではなく、本人の選択の自由を保障する支援が望ましい。地域包括ケアの文脈では、介護サービスと地域資源を連携させ、利用者が主体的に選択できる外出機会を拡充することが重要である。また外出は、閉じこもり防止だけでなく、自己実現支援の手段として位置づけられるべきである。

本研究の意義は、以下の3点に集約される。

1. 外出の「質」に着目することで、本人主体の支援策を提案できること。
2. マズローの欲求階層説を応用し、外出支援を心理社会的ニーズの充足と結びつけ、介護現場での実践的指針を提示できること。
3. 在宅生活における新たな外出支援モデルの構築につながる可能性があること。

結論として、本研究は、要介護高齢者の外出を「意味のある営み」として捉え、主体性を尊重した支援の重要性を明らかにした。外出は、生活の質や幸福感を高めるだけでなく、社会的孤立の防止や自己実現の支えにもなり得る。今後は、より大規模な調査の実施、外出の質を評価する指標の開発、そして各欲求階層に応じた支援プログラムの構築が課題となる。